

大友氏加判衆よりの書状写

— 福岡藩中間家文書 —

溝 淵 芳 正

福岡藩士であった中間家の子孫吉富みゆきさん(山口県長門市東深川正明市三区在住)所蔵の伝来文書の中に、豊後大友氏加判衆より仲間山城守宛の書状が一通残されている。正本ではなく写しではあるが、これまで公表されることがないので紹介したい。

中間氏については、先に本誌第一二三号(七二頁)でも若干触れたごとく、豊前国下毛郡中間郷を本貫地とする小領主で、戦国時代の末期、当時の領主中間六郎右衛門統胤(山城守)は、一戸城(耶馬溪町大字官園)を居城として、大友氏の幕下にあったが、天正十五年(一五八七)、黒田孝高の豊前入部のとき、黒田氏に臣従し、のち慶長五年(一六〇〇)、黒田氏に従って筑前に移った。

ところが、六郎右衛門統胤の嫡男忠胤は、栗山備後の娘を娶っていた関係で、栗山大膳事件(黒田騒動)の巻き添えをくって筑前を立退き、長門の国で毛利大膳大夫に仕えたが、日ならずして病死し、その跡は嗣子なく断えた。

また、六郎右衛門統胤の次男重友も、兄忠胤と同様にいったん禄を離れたが、のちに起きた嶋原一揆に際して、黒田長興の配下に加り、勲功をたてて帰参を許され、その後子孫は曲折を経ながらも明治に及んでいる。

なお、安政五年、龍光院(黒田如水)二五〇回忌のとき、重友八代の孫中間伊九郎統範は、統胤(山城守)二男の家筋の由緒で、中間家の名跡再興を許されている。

同家には数多の古文書が残されているが、その殆んどは福

聊不可有油断候、日数廿日之在城候、恐々謹言

二月二日

義統 在判

下村治部入道殿

平林彈正忠 殿

岡藩時代のもので、豊前一戸城時代に関係ある文書は、本誌第一二三号で紹介した「中間家譜」(中間由来記)と、次に紹介する文書くらいのものである(傍点は筆者)

去年以来、高岩御城番之儀被仰出、是処別而無緩勤番故、彼表無異儀之条、為御感御書并以御条々被御遣候、

珍重候、弥堅固之才覚専要候、委細猶敷戸石見守被御舍候間閣筆候、恐々謹言

二月十三日

(朽網) 宗歴 書判

(立花) 道雪 " "

(戸次) 宗傑 " "

(志賀) 道輝 " "

(中) 仲間山城守殿

これによると、中間山城守は大友氏から高岩城の城番を命ぜられている。

次のような「平林文書」がある(傍点は筆者)

高岩城番為検使越山肝要候、然者今月廿被差替専一候、

これは大友義統から、下村・平林兩人に高岩城々番の監察のため、同城に赴くことを命ぜられている文書である。

右の二つの文書には、どちらも年紀はないが、共に高岩城に関するものであり、もしかすると関連があるのではあるまいか。

それにしても、「高岩城」とはどこにあった城であろうか、浅学の筆者には不明である。どなたか御教示頂ければ有難い。

(下毛郡耶馬溪町宮園)